

新4年生、初卒論会議で今後の意欲語る

マガジンアンケートに寄せる抱負新鮮

5月22日、907号北沢教授室にて、都市工学科・都市計画コースに所属する学部4年生が、初の卒業研究ゼミで今後の研究テーマについて発表した。新しく都市デザイン研究室に所属することになる4年生は6名。自分の興味を深め、今までの知識や経験を総動員して研究に取り組んでいくことに、とまどいがありつつも興奮を隠し切れない様子。

●●新4年生にインタビュー!!●●

マガジン編集部ではアンケートを配布して、好きなまちや場所、研究室を選んだきっかけ、今の興味などを聞いた。(カッコ内は出身地)

■設計演習室の様子



| | |
|---|--|
| <p>鎌形 敬人 (東京都)</p> <p>安田講堂前が好き。東大に入学するときには機械・建築に興味があった。早く学んだことを自分の住むこの街に応用してみたくて、唯一設計に重きを置いているこの研究室を選んだ。少しでもいろいろな都市をみてまわって経験値を上げ、自分の尺度で見られるようになりたい。</p> | <p>鈴木 惇也 (北海道)</p> <p>育ったのは主に大阪とさいたま市。好きな場所はまだない。フランス・NY・カナダ・オーストラリア・タイ・イギリスに行ってみたい。この研究室を選んだのは形として価値あるものを作りたいと思ったから。大きなことをしてかきかたかったから。すてきな都市、好きだと言える都市を探していきたい。</p> |
| <p>パンノイ ナッタポン (タイ)</p> <p>タイの古くからの南西部の文化の中心・観光地であるペブリーという町で育った。都心にある大きな公園や川辺が好き。東京だと、とくに雨の後の代々木公園。都市工にいかうと思ったのは直感で、面白そうだと思ったから。もう一回学科を選んで、都市工を選ぶと思う。</p> | <p>大道 亮 (東京都)</p> <p>谷根千(谷中・根津・千駄木)は大好きな街。特に谷中霊園や谷中銀座、夕焼け段々はお勧めの場所。高校時代九州を一人旅して、湯布院や別府を訪れ、そのときに感じたまちの違いを見て、まちづくりや都市計画に魅力を感じた。デザイン研を選んだのは、都市についてやるなら空間まで落とし込みたいと思ったから。</p> |
| <p>平岡 惟 (京都府)</p> <p>ゆったりとした豊かな環境で育った。京都が大好き。特に、夏の夕方鴨川沿いの景色や空気が好き。東大に入学するときには文系と理系の間のようなことや、航空宇宙などいろいろなことに興味があった。大好きな地元歴史や景観についてもっとよく考えてみたいと思ったことが、都市工に行こうと思った一番のきっかけ。</p> | <p>山田 渚 (神奈川県)</p> <p>横浜の臨海地区は私の青春時代そのもの。横浜の街並みも気風も好き。お気に入りの場所は、山手の「港の見える丘公園」。美しい眺望を一人で見ながら物思いに耽られる場所が好き。デザ研に決めたのは、美しい都市景観の中ではその生活も輝くのではないかと考えたことや多くの人が少しでも気持ちよく日々送れるような都市空間をつくりたいと思ったから。</p> |

———北沢猛教授、土木学会デザイン賞・特別賞を受賞———



「横浜市における一連の都市デザイン」が、「すでに高い社会的評価を得ているもの」として特別賞の対象に。先5月25日に授賞式が行われた。代々の横浜市都市計画局都市デザイン室長が、都市デザイン活動開始期(1971)から北沢教授時代(1995年~1996年に室長職)まで、受賞者に名を連ねた。

■左は柏キャンパス 右は空間研究室内

5月17日、801会議室にて第2回研究室会議が開催された。

2列の椅子が会議机を取り巻く盛況の中、修論執筆に向けたM2陣4人の研究発表が行われた。内容は以下の通り。

- | | |
|------------|---|
| 金宗範 | 「韓国式中高層集合住宅団地沿いの街路活性化に関する研究」 |
| 江口久美 | 「まちと公園の関わりに関する研究—上野を対象として」 |
| リー・クウィン・チー | 「Research on traditional village center and its transformation process」 |
| 柴田直 | 「米国におけるTIF適用事例に関する研究」 |

新宿景観プロジェクト経過報告

5月17日、新宿区役所にて景観計画策定小委員会が開かれた。

当研究室からは、委員長の西村幸夫教授を始め、委員の野原卓、中島直人両助手が参加し、院生プロジェクトメンバーからはD1永瀬節治、宋珍和、中島伸、M1後藤健太郎の4名が傍聴した。この小委員会にむけて取り組まれた連日の作業（その様子は前号参照）は委員会当日の明け方になって完了し、作成した調査報告書の資料を用いて、両助手より熱の籠もった調査報告が行われた。反応としては区の景観アドバイザーの方から「現場ではこのような調査結果で得られる情報・資料が必要である」という発言がある等、好評であった。今回の調査対象であった「筆筒」、「落合第一」の両地区は5月をもって概ねの作業が一段落となり、今後さらにエリアを拡大して新宿区全域の景観調査に一丸となって奮闘していく。

(D1 中島伸)



■新宿・現地調査

ふたたび点るか、読書会の灯

長い休止だった。昨年7月、『建築の七燈』第2章を最後に開催がふつり途絶えていた読書会。新年度を期しての再開呼びかけに応え、M1・3人を含む6人が集まった(4月25日)。猛威をふるった新宿Pのスケジュールに押されて、新年度第2回は5月23日と若干間が空いたが、新メンバーを中心とした参加4名で『七燈』の読了を果たしたのだった。主催者の坂内M2は、「読書会自体が、読みきらぬままに放り出した本。勤勉M1の力を借りて、なんとか会を軌道に乗せたいです」と語った。※次回題材は、ジェイン・ジェイコブズ追悼企画で『市場の倫理 統治の倫理』。言語は、英日どちらも可。希望者は、M2坂内まで。

◆連載◆ 留学生お宅訪問 vol.1 ポンサン



池袋の裏手、路地を何度か折れて着いたドアの先。壁のステッカーや冷蔵庫の調味料がわずかにアジアの風を運ぶ他は、日本型ワンルームの小綺麗な空間で、エキゾチックな内装を望んだ記者の期待は脆くも砕かれました。

しかし、タイ国政府観光庁の仕事で2ヶ国語でこなし、米国留学中の同窓生と英語でメールを交わすのは、紛れも無く母国のエリート留学生の姿です。また、一問一答・「好きな日本の都市」では、故郷バンコクに似ているという理由で福岡を挙げたポンサン。物には出ずとも、取材中に故国とのゆかりを色々垣間見せてくれました。

和の生活のもと、絆は両国に。来日9年、誰も留学生扱いしないほど異国で上手くやるそのコツは、どうやらこの辺りのバランスにもあるようで。その「本燦」の漢字名の通り、これからも日本でキラキラを見せてください。(石井)

◆神戸・明舞団地コンペ◆

5月27・28日、M1全員で参戦予定の「明舞団地再生コンペ」の応募登録と現地見学のため、都合のつく4人(石井、伊藤、筒井、ポンサン)が神戸に飛んだ。「新宿」の徹夜明け、大学から直で羽田へ。6時45分の早朝便でした。神戸市と明石市にまたがる昭和30年代のニュータウンを、午前から夕方まで見て回りました。

神戸牛に舌鼓を打ったあとは、東灘区御影の石井邸へ。気さくなお父さん、お母さんの歓待を受けました。築1年半、建築雑誌にも載ったというステキなお家で、団地ミーティングは夜更けまで続けました。(M1 筒井)

■初見の明舞団地(左)と見学メンバー(右)



編集後記 まさかデザイン研マガジンを編集する身になるとは思いもしなかった1年前。そして気づけば6月。劇的に環境が変わる未来に漠然と不安を抱えていた3月から3ヶ月もたっていた。M1は、新宿プロジェクトが始まってからわけもわからぬままスタートダッシュを切って、ついていくのも精一杯だが、先輩方の豊富な知識と経験に裏付けられた考え方や提案、それをさばっていく技術・能力に感動さえ覚える今日この頃。自分の時間さえさばききれてない状況だが、確実に、ここへ来て貴重すぎる経験をしている。(塩澤)